

令和元年9月5日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2018

課題番号：25370568

研究課題名(和文)母国語の文法構造とそれがもたらす英文法学習の影響と遅延

研究課題名(英文)Grammar structure of L1 language and their influence and delay of L2 English learning

研究代表者

毛利 史生(Mohri, Fumio)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：40341490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：英語の冠詞、比較級構文など、英語学習者(大学生)の習得状況を調査し、学習者の英語レベルと個別現象の習熟度の相関関係、さらには、母国語の文法体系による外国語学習の影響や遅延に関して明らかにすることを試みた。まずは、英語の定冠詞の意味論上のイオタ演算子が日本語にも存在するのか否かの検証を行った。研究結果として、イオタ演算子が日本人の英語の中間文法に作用している積極的な証左を見出すことはできなかった。また、比較級構文においても、日本人英語学習者ならびに中国人英語学習者の習熟度パターンを調査した。英語文法学習に対する母国語の文法体系の影響が一部観察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第二言語習得に関しては、統語論研究を基軸とした研究が成果を出してきた。一方、意味論を絡めた第二言語習得研究はそう多くないと思われる。その点では、今回の研究は学術的意義があるものと思われる。英語の定冠詞の習得に関しては、L2学習者の母国語の機能範疇(DP)の特性から習得の影響や遅延に関して研究がなされてきたが、本研究では、機能範疇自体、さらには定冠詞の意味論上演算子であるイオタの存在を疑う研究報告を提示した。意味論的知見を盛り込まなければ実施できない研究であった。

研究成果の概要(英文)：Investigating the learning process of L2 English learners on particular grammar elements and constructions, such as the definite article and comparative construction, we attempted to clarify the relations between their English level and learning level and even explain the influence and delay observed in the learning process in terms of their L1 grammars. Specifically, we, first, attempted to see if the iota operator, the semantic counterpart to the definite article, is available in Japanese grammar. As a result, we could not see positive evidence to show that Japanese English L2 learners have established their interlanguage with the operator available. When it comes to English comparatives, we also observed that their learning processes are partly influenced by their L1 grammar systems.

研究分野：意味論、統語論、第2言語習得

キーワード：定冠詞 イオタ 比較級構文

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 日英語の特性の顕著な違いに目をつけ、その統語構造の特性の違いに帰着する研究は多く見られる。Fukui (1986)、Kuroda(1988)の分析以来、日本語と英語の顕著な違いに目を付けて、それがどのような要因で起こるのかということに着眼した研究が盛んに行われてきた (Takeda 1999, Fukui and Takano 2000, Fukui and Sakai 2002 等多数)。実際、多くの研究が言語間の統語構造の特性の違いに注目し、個別現象の特性を明らかにしてきた。一方で、両者の共通点がどこまであるのか探っていくという方法もよくとられている (岸本 2005 等)。

(2) 日本語と英語の統語的な共通点に重きを置いて両言語を比較すると、句構造の類似性が際立ってくるのがわかる。単純に句構造の違いだけで、言語間の特徴を語る事はできず、句構造は異なるが、その機能範疇の役割の違いにも言及する必要がある。また、英語で観察される統語論での演算操作が、日本語には観察されないこともある。特に、この研究で取り上げる「定性」や「比較構文」といった現象は、日本人の英語学習において最も学習遅延が見られる項目に含まれている。その原因が日英語間の句構造の違いによるものなのか、もしくは、統語操作 (それに対応する意味論上の演算操作) の有無に帰着すべきか検証する必要がある。また、言語間の句構造や演算操作の違いによって、具体的にどのようなケースで外国語学習への困難が生じるのか、そしてそれに対する効果的な克服法もこの研究を通して検証していく必要がある。ただ、従来の研究は統語論主体であり、意味論的な視点を取り込んだ研究は少ないように思える。その点を加味しつつ研究を進めて行く。

### 2. 研究の目的

(1) 英語の冠詞や (不) 可算性、さらには比較級構文など、英語学習者 (大学生) の習得状況を調査し、学習者の英語レベルと個別現象の習熟度の相関関係、さらには、母国語の文法体系による外国語学習の影響や遅延に関して明らかにしていく。学習者にとって、各々の個別現象の中でも、特にどのようなケースで困難が生じるのか、そしてそれに対する効果的な克服策もこの研究を通して検証していく。

(2) また、日本人学習者と中国人学習者それぞれに対し実験を行い、英語文法学習に対する母国語の文法体系の影響を考察していく。実験調査が予想通りの結果であった場合、それは仮定した母国語文法の仮説の正当性を裏付けたことになり、その点で、理論研究のほうにも研究成果をフィードバックしていく。

### 3. 研究の方法

(1) 研究対象となるそれぞれの個別現象を、理論的見地から整理し、母国語の文法体系の仮説を立てる。そして、母国語の文法体系から生じるであろう英語学習の影響や遅延を予測し、実際に調査を行う。予想外の結果が生じ、仮説に誤りがあると判断できれば、もう一度、理論検証に戻り、新たな仮説の構築を試みる。

(2) 具体的計画としては、日本人英語学習者が定性概念をどの程度、習得しているか調査していく。定性効果が表れる様々なコンテキストを研究分担者のツビトコビッチ氏に作成してもらい、日本語母国語話者、及び中国語母国語話者の「定性」概念の習得状況を調査する。特に、学習者の母国語の文法体系から生じる当該構文や概念の学習への影響を精査していく。研究機関の後半は、研究対象を比較構文や複数性にシフトしていった。

### 4. 研究成果

(1) 総括すると、英語の冠詞、さらには比較級構文など、英語学習者 (大学生) の習得状況を調査し、学習者の英語レベルと個別現象の習熟度の相関関係、さらには、母国語の文法体系による外国語学習の影響や遅延に関して明らかにすることを試みた。研究前提として、個々の文法現象の母国語での意味論的・統語論的メカニズムをまずは提示した。そのメカニズムが個別言語で作動し、英語では作動しなければ、英語学習者の当該文法の学習に何らかの影響・遅延が表出されることが予測される。つまり、実験調査が予想通りの結果であった場合 (遅延が観察された場合)、それは仮定した母国語文法の仮説の正当性を裏付けたことになり、その点で、理論研究のほうにも研究成果をフィードバックできたことになる。一方で、予想外の結果になった場合、仮定した母国語の仮説を疑う必要が生じた。その意味で、本研究は、理論研究のほうにも研究成果をフィードバックすることができた。

(2) 定冠詞をもたない日本語文法に定性解釈に際してイオタ演算子が作動するか否かを考察した。イオタ演算子の特性である Maximality 解釈 (コンテキスト内の個体の最大元を抽出する解釈を導出する演算子) を要するコンテキストにおいて、L2 学習者が著しく誤った回答を示していた。イオタ演算子が日本語では入手不可能であることを示す証左であると主張した。つまり、英語の定冠詞の学習が困難である一因は、両言語の統語構造の DP (Determiner Phrase) の特性が異なるというより、日本語文法にイオタ演算子自体が存在しないことを述べた。

(3) 日本語の文法にはイオタ演算子が存在しないことを主張したが、統語構造の DP (Determiner Phrase) の有無までは検証していない。普遍的な DP 仮説 (Lonobardi 1994) に立脚すれば、日本語にも DP は存在する。普遍的 DP 仮説を基に Ionin et al. (2004, 2008) は、DP 主要部の特性を定性 (definiteness) / 特定性 (Specificity) の二分法を主張した。本論文では、実験を通して、日本人の L2 英語学習者が、特定性 / 定性に関係なく、一定の回答を示すことを指摘した。DP の特性はむしろ、Gillon (2012, 2015) が主張しているように、領域制限 (domain restriction) の素性が指定されている可能性を示唆した。

(4) 日本語文法にイオタ演算子は存在しない可能性を述べた。従って、日本語母国語話者は、イオタ演算子の特性である Maximality 解釈を英語の定性解釈に適用できないことを結論付けた。ただ、Maximality の概念が日本語文法に存在しないわけではない。本論文では、日本語の普遍化詞「も」は Maximality 演算子であることを主張した。普遍化詞「も」は、全称量化詞、付加詞、尺度普遍化詞等、様々な環境で生起する。が、これらの用法に共通する基幹要素は Maximality の概念であり、「も」を Maximality 演算子として位置付けることで、「も」の様々な用法を説明できることを述べた。

日本語文法に Maximality 演算子 (普遍化詞「も」として具現化される) は存在するが、名詞の定性解釈に際して当然作動しない。つまり、Maximality 演算子は普遍化詞「も」で具現化されており、ゼロ形 (音形のない形) では日本語文法では作動しないことが理解できる。また、そもそも、日本語の裸名詞は種を指示する個体タイプの名詞であり、それ自体が、当該コンテキストにおける最大元である。名詞の Maximality 解釈において、英語の定冠詞のような決定辞は必要ないことが帰結として還元できる。

(5) 英語、日本語、中国語の比較級構文を意味論・統語論の観点から比較検証を行った。英語と異なり、日本語は、(i) のような節タイプの比較級構文に制限があり、中国語に至っては、節タイプの比較級構文は許されない。

(i) a. John bought more umbrellas than Mary bought.  
ジョンはメアリーが買ったよりたくさんのカサを買った。

結論としては、日本語は、中国語同様に、節タイプの比較級構文は存在しないと述べた。一見節タイプと思われる構文は、程度名詞 (degree nominal) が削除された結果であるという Sudo (2014) の分析を指示した。中国語との違いは、中国語では程度名詞の削除が認められないことに起因することも併せて主張した。

(6) 中国人英語学習者と日本人英語学習者の比較級構文の習得状況を調査した。まず、中国語には節タイプの比較級構文が存在しないことから、英語の節タイプの比較級構文に対し低い許容率であると予測したが、日本人英語学習者との相違は見られなかった。ただ、英語比較級構文で仮定されている DegP (程度句) の移動が両言語には存在しないことを論文④では主張しており、DegP の長距離移動が関与するケース (ic) では、著しく許容率が低下することを述べた。

(i) a. John is smarter than Mary.  
b. John is smarter than Mary is.  
c. John is smarter than Kelly thinks Mary is.

これは、日本語及び中国語には DegP 移動が存在しないことに起因する、いわば Negative Transfer (負の転移) の一例である可能性を示唆した。

日本語の複数名詞である豊語名詞 (例 山々、花々) の意味論分析を行った。日本語母国語話者の「複数性」に関する概念を考察するのが目的であった。観察レベルとしては、複数解釈は複数名詞の外延的意味から導出されるのではなく、含意計算から導出されることが結論として導き出された (Sudo 2015)。これは、英語の複数名詞で主張されている 2000 年代の研究と同様である。ただ日本語の豊語名詞は、英語の複数名詞と異なり、真の (個体タイプの) 複数名詞ではなく、種名詞の対 (kind-doublet) であることを提案した。

(7) ただ、当初予定していた研究課題を遂行することができない点も数点あった。定性解釈の次に、可算性 (複数性) 解釈に関する研究、さらには、L2 英語学習者への個別文法現象への克服策に関する提言、といったことには至ることができなかった。

## 5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕 (計 5 件)

①. Fumio Mohri, Acquisition of Definiteness by L2 Learners of English, 福岡大学言語教育センター紀要 13 号、査読なし、2014、161-170

- ②. Fumio Mohri, Remi Kawaryu, Acquisition by L2 English Learners and the Feature specification in D, 福岡大学人文論業第 48 巻第 2 号, 査読なし、2016, 1-18
- ③. Fumio Mohri, The Particle Mo in Japanese and its Roles in Numeral Indeterminate Phrases, The Proceedings of PLC Vol 23, 2017 査読あり、2017, 160-170  
<http://repository.upenn.edu/pwpl/vol23/iss1/19>
- ④. Fumio Mohri, Rai Tei, Degree Nominals in Japanese and Chinese Comparatives MIT Working Papers in Linguistics No. 85, 2017 査読あり、119-133  
<https://glowlinguistics.org/asial1/proceedings/>
- ⑤. Fumio Mohri, Kanako Maruo, Rai Tei, L2 Research on Clausal Comparatives in English: Positive and Negative L1-transfer, 福岡大学人文論業第 49 巻第 3 号, 査読なし、2018, 1001-1018

[学会発表] (計 3 件)

- ①Fumio Mohri, The Particle Mo in Japanese and its Roles in Numeral Indeterminate Phrases (2016 年 3 月 The 40th Pennsylvania Linguistics Conference)
- ②Fumio Mohri, Rai Tei, Degree Nominals in Japanese and Chinese Comparatives (2017 年 2 月 Glow in Asia 2017 National University of Singapore)
- ③Fumio Mohri, Plurality in Japanese: Reduplicated Nouns (2018 年 11 月 The 42nd Annual Meeting of the Atlantic Provinces Linguistics Association (Dalhousie University))

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：ロバート ツビトコビッチ  
ローマ字氏名： Robert Cvitkovic  
所属研究機関名：東海大学  
部局名：国際教育センター  
職名：講師  
研究者番号（8桁）：00412627

研究分担者氏名：鄭磊  
ローマ字氏名：Tei Rai  
所属研究機関名：福岡大学  
部局名：留学生別科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：40614475

研究分担者氏名：スティーブン ハウ  
ローマ字氏名：Stephen Howe  
所属研究機関名：福岡大学  
部局名：人文学部  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：90461491

(2)研究協力者  
研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。